カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

7月号は休刊いたします

共に平和を祈り、平和をつくる

平和巡礼団 ゲルニカへ

原爆被爆者ら現地を訪問

高見大司教を団長とした巡礼団の皆さん
＝ピカソ『ゲルニカ』の前で＝

20世紀を代表する傑作、ピカソの「ゲルニカ」は、市民戦争下1937年、反乱軍に加勢したドイツ軍がスペイン北部の街ゲルニカを爆撃した残虐性を告発するために描かれました。無差別爆撃は、その後、第2次世界大戦でエスカレートし、一瞬にして、街ごと住民を無差別に殺戮する広島・長崎への原爆投下に至りました。このゲルニカとの交流は、7年前の被爆マリア様を携えた巡礼以来続いています。

今年は爆撃から80年。4月25・26日の2日間、高見三明大司教様を団長に原爆被爆者らを含む計28人の巡礼団が、ゲルニカを訪れました。まず、巡礼団は、ゲルニカ爆撃の生存者と共同で、若者たちを招待した集会を開きました。ゲルニカのルイス・イリオンドさん（94）は、3時間以上も続いた爆撃の恐ろしさを話しました。長崎の被爆者、末永 浩さん（81）は、故山口仙二さんの被爆体験を紙芝居で紹介しました。国連で山口さんが「ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ウォー」と訴えた場面で紙芝居が終わると、イリオンドさんが末永さんに近づき抱きしめたのです。過酷な体験をもとに、平和を強く求める心は同じであることを確信した瞬間でした。

4月26日爆撃の日、犠牲者が眠る墓地で追悼献花式が行われました（下段の上の写真）。巡礼団が、花束と千羽鶴を供えた時、会場から大きな拍手が起こりました。長崎がゲルニカと共に平和の大切さを訴えていることが、広く市民に知られていることを実感しました。その後、街の中心にある聖マリア教会で行われた追悼ミサで、高見大司教様は、「武器で平和はつくれない。平和を愛する心を養い、共に平和をつくって行きましょう」とお話しされました。この教会には、爆撃で頭部だけになったマリア様が安置されています。広島・長崎の被爆70年の一昨年、ビルバオ教区のイセタ司教様が浦上教会にこのマリア様のレプリカを贈ってくださいました。今回はそのお礼に、被爆者の西村勇夫さん（83、浦上教会所属）が心を込めて作った、浦上教会の被爆マリア様のレプリカ（右の下の写真）が寄贈されました。ミサの後、このマリア様に近づき、優しく抱擁する人々の列が続きました。傷ついたマリア様に、平和を祈る。同じ思いのゲルニカの人々の姿に胸が熱くなりました。

最初の街と、最後でありたいと願う街。交流が今後も続き、世界平和を発信する活動につながることを期待します。

三浦町教会信徒　畠山えり子

乙女峠まつりに参加して

浦上四番崩れから150周年

去る5月3日（水）、早朝5時、私たち浦上信徒総勢78人は「乙女峠まつり」に参加するためにバスで津和野に向けて出発した。車中では、ロザリオを唱え、子どもたちが作った紙芝居で先祖を偲んだ。

「乙女峠まつり」は「浦上四番崩れ」で津和野に配流された殉教者たちの遺徳を偲ぶ行事で、毎年、乙女峠で野外ミサが行われている。今年は「浦上四番崩れ」150周年目にあたる。

「浦上四番崩れ」とはキリシタン禁教時代の1867年（慶応3年）に浦上で起こった検挙事件である。自葬事件に端を発し、このことで浦上村の人々がキリシタンであることが明るみに出た。

翌年、ほとんどの村民3400人近くが捕らえられ明治新政府の方針により20藩22カ所に配流され、拷問などによって改宗を強いられた。津和野へは153人が流され、37人が殉教した。

野外ミサで説教する郡山司教

「乙女峠まつり」には北海道から沖縄まで、2000人近くの信徒が参加し、鹿児島教区郡山健次郎司教様の司式のもとミサが執り行われた。司教様の説教では「役人が改宗を迫っても、誰もそれに従わなかった。殉教者は役人が理解できない深い世界を妥協することなく生き抜いた。我々もそれに倣って生きるべきだ」と説かれた。

ミサ終了後、途中十字架の道行を唱えて歩き、殉教者が葬られている蕪坂を訪れ、生花を供えて先祖を偲んだ。

来年は配流から150周年の記念の年になる。来年も皆で参加することを誓って巡礼を終えた。

浦上教会 評議会議長　深堀　勝

17年度 教区評議会総会

活動方針決まる

カトリック長崎大司教区教区評議会（会長高見三明大司教）は5月3日（水）、2017年度総会をカトリックセンターで開催し、主に前年度の活動・決算および本年度の活動方針・予算案を審議した。採択された活動方針は次の通り。

「教区シノドスをうけ、『カテキスタ養成・小共同体づくり・ミゼリコルディア長崎の発足』以上の三本の柱を中心に頑張ろう」

審議に先立ち、高見大司教があいさつし、近年のカトリック教会の縮小傾向に危機感を持ち、教区シノドスからの再出発を訴えた。具体的には、「キリストの心を心とする」ため、聖書を読み、読んだことを生活に結び付けて味わい、味わったことを分かち合い、キリストの愛といつくしみに触れて、それを証しし実践しよう、と説いた。

教区評議会役員

会長　高見三明大司教
副会長　山脇 守（総代理・長崎北地区長）
議長　林田殉二（長崎中）
副議長　松山勝則（長崎北）、山内茂雄（佐世保）、紙﨑真由美（長崎北）
事務局長　下窄英知（教区本部事務局長）
書記　泊 光治（長崎南）、今田亜希（長崎北）
会計　藤田千歳（長崎中）、中村博（長崎南）
委員　岩本繁幸（教区会計）、中濱敬司（信仰養成・家庭）、紙﨑新一（福音化推進）、松田聡史（教会奉仕者等養成）、下山盛朗（典礼）、山田良秋（広報）、葛嶋秀信（女性部担当）、久志利津男（長崎中地区長）、橋本 勲（長崎南地区長）、橋口朝光（佐世保地区長）、山村憲一（平戸地区長）、眞浦健吾（上五島地区長）、中村 満（下五島地区長）、松本久幸（平戸）、下野 保（上五島）、入口正雄（下五島）、開ヒロ子（長崎中女性部）、外輪早苗（長崎南女性部）、相川照美（佐世保女性部）、川上由美子（平戸女性部）、野下律子（上五島女性部）、鍋内絹代（下五島女性部）、浜口奈利子（修女連）

浦上四番崩れ 150周年記念祭

先祖が求めた「信仰の自由」を思い起こし、その生きた道を語り継ごう

◆7月16日（日）
13:00　秘密教会跡～浦上教会
　　保護の聖人行列
14:00　浦上教会で記念ミサ

2017年度 行事予定

月	日	行事	備考
5月	2日（火）	第139回クルシリヨ	5/5まで
	3日（水）	教区評議会総会	カトリックセンター
	14日（日）	井持浦ルルド祭	井持浦
	16日（火）	教区司祭黙想会	大司教館(5/19まで)
	21日（日）	雲仙殉教祭	雲仙メモリアルホール
	23日（火）	教区司祭黙想会	立山修道院(5/26まで)
	30日（火）	人権社会確立第37回全九州研究集会	カトリックセンター他(5/31まで)
6月	11日（日）	鷹島殉教400年記念ミサ	大村湾・鷹島(時津)
	18日（日）	公開聖書講座	カトリックセンター
		第1回高見杯青年ミニバレー大会	大司教館体育館
	19日（月）	司祭研修会	大司教館
	24日（土）	新たな家庭の霊性を求めて「食の力」講演会	カトリックセンター
	25日（日）	新たな家庭の霊性を求めて「食の力」講演会	青方カトリックセンター
7月	16日（日）	浦上四番崩れ150周年記念祭	浦上教会
	31日（月）	沖縄平和学習	8/3まで
8月	5日（土）	広島ピース・スタディー	8/6まで
	8日（火）	原爆殉難者慰霊祭	爆心地公園
	9日（水）	平和祈願祭（長崎）	浦上教会・平和公園
	11日（金）	NAGASAKI平和を願うコンサート	中町教会
		平和を祈る集い（長崎教会管区共催）	大名町教会(福岡)
	15日（火）	聖母平和祈願祭（佐世保）	アルカスSASEBO
9月	3日（日）	大村殉教祭	シーハットおおむら
	5日（火）	結婚講座秋コース開講	毎週火(11/7まで)
	17日（日）	福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭	焼罪史跡公園
	18日（月）	公開典礼講座	カトリックセンター
	24日（日）	聖トマス西と十五殉教者祭	中町教会
10月	8日（日）	島原・天草殉教福者記念ミサ	南島原・原城跡
	29日（日）	牢屋の窄殉教祭	久賀・牢屋の窄
		公開聖書講座	カトリックセンター
11月	1日（水）	司教座教会献堂記念ミサ	浦上教会
	3日（金）	長崎青年の日	11/4まで
第2	日曜 予定	黒瀬の辻殉教祭	生月・クルスの丘公園
	19日（日）	教区主催追悼ミサ	浦上教会
	23日（木）	宗教改革500年共同記念行事	浦上教会
	25日（土）	日本カテキスタ会主催公開講座	11/26まで
12月	3日（日）	平戸ザビエル祭	平戸教会
2月	4日（日）	日本二十六聖人殉教記念ミサ	西坂公園
	6日（火）	司祭研修会	大司教館
3月	4日（日）	信仰養成講座修了式	カトリックセンター
		教区青年黙想会	大司教館
	17日（土）	日本の信徒発見の聖母（ミサ）	大浦天主堂
	21日（日）	司祭助祭叙階式	浦上教会

一般信徒の列福

オプス・デイ司祭　尾崎 明夫

1　高山右近、一般信徒。

今年2月大阪で高山右近の列福式が盛大に行われました。この慶事で注目したいことは、右近が教会の中での身分は一般信徒だったという点です。つまり、聖職者でも修道者でもない人が福者になったわけです。右近は独身ではなく、妻も子どももいました。この世を捨てて修道院で祈りと労働に専念していたのではなく、戦国の世の中で一族と家臣団と領民を守るという重い責任を負っていました。そして秀吉による追放後は歴史の荒波のまっただ中に漂流したのです。

聖人や福者というと普通は修道者や聖職者を連想します。有名な聖人のほとんどは修道者か聖職者ですから当然でしょう。しかし、福者や聖人の中に一般信徒もいます。日本には大勢の殉教者がいますが、そのほとんどは信徒です。２００８年長崎で列福された１８８人の殉教者の名簿を見れば、司祭、修道士と伝道師は数名でそれ以外はみな信徒です。これらの信徒殉教者も、逮捕される以前から平凡な日常生活の中で神と隣人との愛に生きていました。その様子は、これらの殉教者の生涯を簡潔に描いた『恵みの風に帆をはって』を読めばよくわかります。普段はいいかげんな信仰生活を送っていて、捕らえられて急に聖人に変身するのは、日々の練習をサボっている人が突然何かの大会で優勝することと同じくらい無理な話です。

以上の事実は、「すべてのキリスト信者は、聖性とそれぞれの身分における完徳とを追求するように招かれ、また義務づけられている」（教会憲章42）という第２バチカン公会議の教えが真実であることを示しています。この教えは「天の父が完全であるように、あなたがたも完全なものとなりなさい」（マタイ５・48）、あるいは「あなたがたが聖なるものになること、これが神のお望みです」（一テサロニケ４・３）という聖書の教えに基づいています。

ユスト高山右近の肖像画（三牧樺ず子氏作）

2　信徒という召し出し

第２バチカン公会議は「信徒は…そこ（世俗の中）に神に招かれた」（教会憲章31）と言っています。つまり、一般信徒は、修道者にも聖職者にも呼ばれなかったので仕方なく信徒の生活に甘んじているのではなく、「信徒の召し出し」を受けたといえるのです。古巣 馨神父様の『ユスト高山右近』には、「（右近は）何度も世俗を捨て、家族からも離れ、何にも煩わされることのない隠遁生活を願ったことがありましたが、霊操（聖イグナチオの指導書にしたがった黙想）を行うことで、隠遁生活者ではなく、一人の夫であり、父親であり、信徒であり、…すべてを捧げて召された道を歩み続ける決断をした」（１２８頁）ことが紹介されています。

言い換えるならば、この世間から離れなくても聖人になれるということです。もちろん、神様から奉献生活の召し出しを受けた人は別です。しかし、多くの信者はこの世間に住むように神様から呼ばれているのです。そのような人の最高の模範は、聖母マリアと聖ヨセフです。お二人はザビエルのように遠い海外の国に行って福音を宣べ伝えたわけでも、聖トマス・アクィナスのように素晴らしい学問的な業績を残したわけでも、マザー・テレサのように貧しい人々に仕えるために一生を捧げたわけでもありません。聖ヨセフは長年ナザレの村で大工として働き聖家族の長の任務をつとめ、聖母は母として妻として聖家族を支えただけです。つまり、聖人になるには輝かしい業績やあっと驚くような奇跡は求められていないのです。では何が必要なのでしょうか。

3　仕事と家庭

神は人間をお造りになるとき、各人に使命をお与えになります。世俗に生きるようにと召された人は、自己に与えられた生活を聖化するのが使命です。社会の中で生活すると、大きく言って二つの義務が生じます。一つは家族をはじめ隣人に対する義務、もう一つは仕事の義務です。この二つの義務を神と隣人への愛のために英雄的に果たしていくのが、聖人になるために要求される条件です。これらの義務の履行が時に信仰生活を難しくすることは、誰でも経験することでしょう。一般信徒は、こういう問題から逃れて祈りに専念する道ではなく、それらと格闘しながら信仰を実践するように招かれているのです。

絶えずそのような努力を続ける人は、良い父（母）、良い夫（妻）、良い子、良い兄弟、良い社会人、良い同僚になります。聖人とは良い人間ともいえるでしょう。ただし、凡庸なレベルの良い人間ではなく、英雄的なレベルの良い人間です。

誰もが聖性に呼ばれていることを１９２８年から説き続けたオプス・デイ創立者の聖ホセマリアは、日常生活の中での小さな戦いの具体例を挙げています。「（やる気のないときも）決めた時間割をきちんと守ること、決まった時間に起き上がること、難しい仕事を理由もなく遅らせたりせずに果たすこと、…疲れや嫌気や冷淡な心にもかかわらず、祈りの時間になれば祈りをすること、…人々の正当な必要を満たすため快く計画を変更したり中止したりすること」（『神の朋友』１３８）。雨の日も風の日もこのような小さな戦いを続けるのは英雄的なのです。

4　祈り、秘跡、霊的指導

このような見た目には平凡だが本当は難しい生活ができるためには、神の助けが欠かせません。神の助けを得る手段が祈りと秘跡です。上記の人たちが聖人になったのは、神様と親しい生活を送っていたから、つまり祈る人だったからです。「祈りをしない聖人…？　そんな聖人の『聖性』は信じられない」（『道』１０７）。また、洗礼で頂いた恩恵を回復または増すために必要な秘跡、つまりミサとゆるしの秘跡に頻繁にあずかっていたはずです。

もう一つの手段が指導を受けることです。勉強でもスポーツでも上達するためには、その道に通じた先生やコーチに指導を乞うでしょう。信仰生活も同じです。「霊的指導者」を探し、その指導に謙虚に従うことが強く勧められます（『カトリック教会のカテキズム』２６９０参照）。

一般信徒で福者や聖人になった人たち、あるいはまだ列聖されていなくても模範的な信仰生活を送った人たちの伝記を読むことをお薦めします。信徒の聖人の場合、資料が少なく、その隠れた英雄的戦いを知るのは簡単ではないでしょう。しかし、伝記の中に彼らが普段の生活の中でいかに祈り、秘跡を受け、指導を受けていたかが垣間見られるところがあるはずです。それを探してください。信仰生活に進むための多くの示唆を受けるでしょう。

神に信頼し さらなる尽力を

長与小教区設立25周年記念

今年、小教区設立25周年を迎えた長与教会では、5月14日（日）高見三明大司教様をお迎えして、荘厳に記念ミサが行われました。ミサの中で大司教様は、小教区の発展なくして教区の発展はあり得ないこと、信徒は指導司祭と一致団結して発展に尽力されるようにと話されました。

教会の創設者、故岩永四郎神父様をしのび、当日ご参列いただいたゆかりある神父様方への感謝を思いながら、ミサ後の祝賀会も子どもたちと大勢の信徒たちで立錐の余地もないほどの賑わいとなりました。

若者の教会離れ、信徒数の減少、日曜のミサを敬遠する信徒の増加など問題が山積していますが、神様が守ってくださることに信頼し、主任司祭、村中 司神父様の指導のもと、さらに尽力したいと思っています。

長崎方面の教会巡礼の際には、どうぞ長与教会まで足を延ばしてください。美しいステンドグラスに彩られたきれいな教会が歓迎いたします。

長与教会広報部　早田 誠

神の愛に包まれ、決意新たに

立山でクルシリヨ開催

第１３９回クルシリヨは、5月2日（火）夕方から5日（金）まで、イエズス会立山修道院で、担当司祭中村倫明師の指導のもとに17小教区19教会28人（男性9、女性19）が参加して開催された。

母娘1組、兄弟2組が参加し、74歳～27歳の家族的雰囲気の中で新しい多くの兄弟姉妹を得た。教区の方々の尊い祈りと犠牲、神の愛に包まれ、神の心を体で感じ、キリストとの真の出会いへと導かれ、これからも小教区の一部分としての信仰生活、奉仕に生きるよう、決意を新たにした。

参加者は次の通り。

浦上2、稲佐2、城山3、木鉢1、大浦1、深堀1、滑石3、時津1、植松3、諫早1、三浦町2、俵町1、大野2、佐々1、上神崎1、紐差2、西木場1

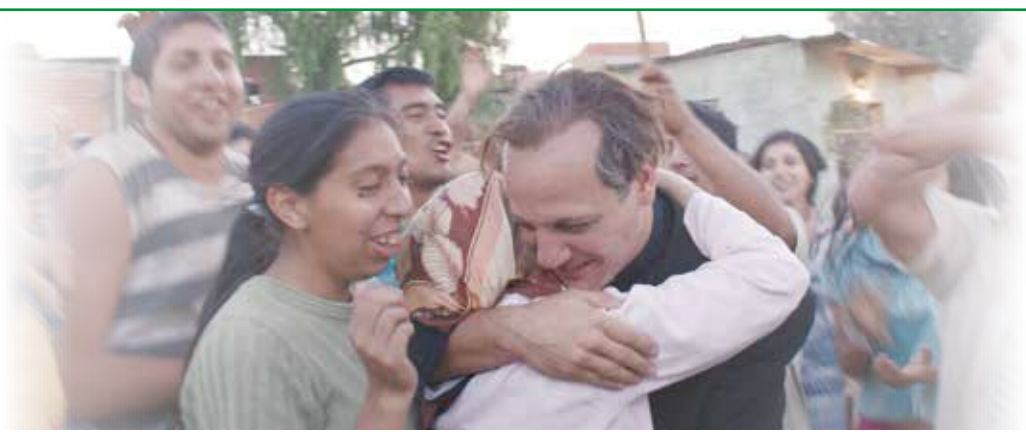
ローマ法王になる日まで

最近『ローマ法王になる日まで』を見て、その当時私が知っていたホルヘ神父（教皇フランシスコ）の思い出がたくさん浮かんできました。それは、この映画が現実に近いものを描いているからだと思います。

私が1981年にイエズス会に入ったとき、映画で描かれている軍事政権は既に過ぎ去っていましたが、多くの傷跡を残した歴史として語られていました。しかし、17歳だった私たちはその時代に目の前にいるホルヘ神父がどれほど活躍していたかについてはまったく知りませんでした。（中略）

現教皇として親しまれるフランシスコは、ご自身が持っている良さをさらに発展させながら、さらにそれを人々のために用いているように思います。一般のメディアに出ていないパパ・フランシスコの人となりをご覧いただくために、この映画を推薦します。

イエズス会日本管区長　レンゾ・デ・ルカ神父



©TAODUE SRL 2015

監督：ダニエーレ・ルケッティ　出演：ロドリゴ・デ・ラ・セルナ／セルヒオ・エルナンデス／ムリエル・サンタ・アナ／メルセデス・モラーン　2015年／イタリア／113分　原題：Chiamatemi Francesco - Il Papa della gente
提供・配給：シンカ／ミモザフィルムズ　後援：駐日バチカン市国ローマ法王庁／在日アルゼンチン共和国大使館／イタリア大使館／イタリア文化会館／セルバンテス文化センター東京　推薦：カトリック中央協議会広報
2017年6月3日（土）よりヒューマントラストシネマ有楽町、新宿シネマカリテ、YEBISU GARDEN CINEMAほか全国順次ロードショー　ホームページ roma-houou.jp

長崎セントラル劇場　【上映開始時間】6/17㈯～6/23㈮ ① 14:00 ② 19:25　6/24㈯～6/30㈮ ① 11:50 ② 17:30

先人の信仰の強さ思う

雲仙殉教祭、鷹島殉教の朗読劇も

江戸時代の迫害で亡くなった信徒を追悼する第34回雲仙殉教祭（長崎大司教区主催）が5月21日（日）雲仙メモリアルホールであり、県内各地から集まった約1300人が先人の信仰の強さに思いをはせた。

雲仙や島原では1627年、島原藩主松倉重政の迫害でパウロ内堀作右衛門と息子3人ら計29人が命を落とした。

ミサでは高見三明大司教が、殉教者たちが厳しい拷問を受けた雲仙地獄で採取した水を参列者に振り掛けて祝福（写真）。説教に立った金（キム）桐旭（ジョン）師（滑石助任）は「内堀作右衛門が死ぬまで賛美したご聖体を今では自由にいただけるのに、私たちは生活の中心に据えていないのではないか」と指摘し、「小さなパンがイエス・キリストのおん体に変わる神秘にあずかる者にふさわしい生活を過ごそう」と呼び掛けた。雲仙地獄への巡礼もあり、多くの信徒が歩きながら殉教者に祈りをささげた。

ミサに先立ち、時津教会の中学生ら信徒とお告げのマリア修道会の志願者が、1617年に大村湾に浮かぶ鷹島であった殉教（今年6月1日で400年を迎え、6月11日に記念ミサを予定している）をテーマにした朗読劇を披露した。

人

国内二度の列福式

殉教者の絵を手掛けた

三牧樺（か）ず子さん

二度の列福式でペトロ岐部と187殉教者、ユスト高山右近の肖像画を手掛けた。長年聖画を描いてきたが、殉教者の絵はこの時が初めて。「殉教者たちに〝聴く〟という（心の）作業が必要でした」。幾冊もの本を読み、〝行間に分け入り〟、祈りながら制作を進めた。

高山右近の場合は、モデルとなる人物を通して右近像を見いだす。「苦しいです。ただただ、ユスト高山右近を尋ね続けました。『深められた信仰で主の十字架に触れた人』のまなざしとたたずまいを」

体力的に手に震えがきて、肝心なところに筆の穂先がいかない時も。「そうすると恐れがでてきます。だけど、『主よ、ご一緒に』と。すると動かせる。現実的ではないけれど、そういう体験があります」

1997年、長崎市の福祉施設からチャペルのステンドグラスの原画制作を依頼され初めて長崎へ。その後98年、熊本から長崎へ移住した。城山教会、有川中学校のステンドグラスの原画も制作。「不思議です。『どうぞ私を使ってください』—。祈っている通りに、（主は）私を長崎に連れて来てくださり、使ってくださった」

居室はアトリエ。「シンプルな生活。恵まれた環境にいます。描くことは私の使命。そのために命をいただいている。本当に幸せです。生涯その道を歩き続けるだけ」長崎への移住は一人息子も受け入れてくれた。「夫も私の生き方に対してそうでした。『私は逝くよ、描きなさい』それが最後の言葉でした」

17歳で受洗。10代から洋画家・長船義正氏に学び、人物画のデッサンをたたきこまれた。20代はじめ、母親の介護のために職場（人吉市内の幼稚園）を退き、生活のために肖像画を描くようになった。最初の仕事はレデンプトール会の聖ジェラルドの肖像画。聖人画の依頼が続き、貧しい母子家庭を支えた。「しっかり描かないとお金にならない。厳しい生活が3年間続きました。でも、すばらしかった。祈って、母の世話をしながら描く。霊的にも絵を描く技術の上でも鍛えられ、恵みのときでした」

三牧さんの後継者を危惧する声も聞かれるが、「何十年も前から私を育ててくださった神様がいて、今、私を使ってらっしゃる。準備が続いていたわけです。誰も知らないうちにね。ですから神様がご存じ」と柔らか。

現在、聖パウロ三木の絵を制作中。今後、殉教者や原爆で亡くなった人への鎮魂の思いでイコン（テンペラ画）も—と願う。

聖画を描いて60年余。さまざまな依頼に応えるうちに、油絵、水彩画、パステル画、日本画…独学で学んだ。「作品は描き手のもとを離れると自らその存在を生き始める」

好きなみ言葉は、「恐れることはない」「神は共におられる」。カトリック美術協会会員。滑石小教区さくらの里聖家族教会所属。84歳。

奇跡の絆で結ばれて

井持浦ルルド祭

5月14日（日）、井持浦教会（主任中村 満師）でルルド祭が行われた。2日前に記録的な豪雨に見舞われた福江島。開催も危ぶまれたが、当日は、井持浦小教区の懸命な準備の中、五月晴れに恵まれた。

下五島各地から集まった信徒は約350人。船とバスを乗り継いで参加する者や、30kmの道のりを徒歩で向かう司祭やシスターたち、信徒の姿もあった。世界平和を願ってカントリーパークから開始したロザリオ行列を、28年ぶりに美しく塗り直されたルルドのマリア像が迎えた。ミサの説教で小島 明神父（福江助任）は「ルルドは奇跡の場所。今ここに神様から呼び集められた私たちも奇跡の絆で結ばれている」と説き、この恵みを伝えに出かけようと呼び掛けた。

式を終え、病者のためにルルドの水を持ち帰る人たちは福音宣教者の足取りであった。

子どもと女性の人権相談室

最初のご相談はお電話でお願いいたします。詳細は各小教区に配布されているポスターをご参照ください。

場　所　カトリックセンター別館
連絡先　095・865・7829
時　間　月～金　10時～16時
＊第3月曜日と休日（祝日・教区本部事務局休業日など）を除く

相談室室長　福田真理

世界平和のために祈る

ファティマの聖母出現100周年

写真提供：カトリック新聞社

ファティマの聖母出現100周年を迎えた5月13日（土）、これを記念するミサが東京カテドラル関口教会でささげられた。ミサの主司式は司教協議会会長の高見三明大司教。駐日教皇大使ジョセフ・チェノットゥ大司教と日本の司教らが共同司式し、集まった400人以上がフランシスコ教皇の意向に合わせ、特に世界平和のために祈った。

ミサでは、ポーランド人女性から寄贈されたという、実物と同じ大きさのファティマの聖母像（複製）が祭壇前に据えられた。聖母像は今後、希望する教区を巡回し、聖母出現が最後となった10月13日、広島教区でのミサの後、同聖堂に永久保存される予定。

長崎教区においては、8月15日（火）佐世保での聖母平和祈願祭までの一週間、この聖母像を迎えるよう計画している。

〝イエス様に従いたい〟

アウグスチノ会に新司祭誕生

4月22日（土）11時から城山教会で、高見三明大司教司式による司祭叙階式が行われた。叙階されたのは、聖アウグスチノ修道会の松尾 太（ふと）新司祭（34、福岡・笹丘教会出身）。同教会での叙階式は、2005年の山野聖嗣（きよつぐ）師（城山教会出身）以来12年ぶりだった。

式には、同修道会のトニー・バンクス副総長や柴田弘之日本分管区長をはじめ国内外の関係者、城山・笹丘・葛西・港の各教会の信者ら合わせて約500人が駆け付け、喜びを分かち合った。

柴田分管区長は、「当会の日本での再宣教地、長崎で叙階式をすることができ、とてもうれしい。召命は家庭からといわれる。ご両親、今は亡き祖母の祈りがあって今日の日を迎えることができたと思う。自分の中で神父様と呼ばれることはどういう意味か探し続けなければいけないだろう。これからの新司祭の歩みの上に、お祈りと支えをいただきたい」と語った。

最後に松尾新司祭は、修道生活における自身を振り返って「神様にすがり直して歩んで行こう、やっぱりイエス様に従いたいという心が消えなかった」と語り、決意と喜び、感謝の言葉を述べた。

「つながって生きる」

フォコラーレ主催 マリアポリ

5月5日（金）～7日（日）カトリックセンターで「つながって生きる」をテーマに、フォコラーレ主催のマリアポリが行われました。

赤ちゃん連れの家族からお年寄りまで、さまざまな方の参加がありました。東京、埼玉、奈良、広島、鹿児島、徳之島、沖縄、そして韓国からも17人の方が参加され、お二人が日本語でみ言葉を生きた経験を分かち合ってくださいました。

黙想を通してテーマを深め、10のグループに分かれ、分かち合い（写真）の時間も持ちました。2日目には高見大司教様がゴミサをささげてくださり、「ゴミサの大切さ」を話してくださいました。

ワークショップでは、ダンス、コーラス、ブローチ作り、思い思いに絵で天国を表現するグループ、浦上教会周辺の巡礼などを楽しみました。マリアポリ祭では、韓国人と日本人の殉教劇も演じられました。

会場の温かな雰囲気に「癒やされた」「新しい出会いに感謝です」などの喜びの声が聞かれ、また、初めて参加された方からは「愛の力のすごさを感じた」「参加している人たちが優しさとゆるす心を持てることを示してくれた気がします」などの感想が寄せられました。たくさんの交わりと喜びの三日間となりました。

小圷玉美

フランス出身の聖人に献花

仏総領事、中町教会を訪問

4月30日（日）、在京都フランス総領事ジャン・マチュー・ボネル氏が中町教会（主任橋本 勲師）の聖トマス西と十五殉教者記念庭園を訪れた。

今回の訪問は行政関係者を介して急きょ連絡が入り、主任神父をはじめ壮年会、聖歌隊を中心に、信者らの協力によって迎える準備が整えられた。

16時過ぎ。集まった総勢50人余の信者らは、教会に到着した車を降り立ったボネル総領事を、フランスと日本の国旗を振りながら、また、拍手で迎えた。総領事は初めに、聖歌隊による歌が流れる中、16聖人像の中央の十字架に献花（写真）。16聖人の一人、フランス出身の司祭「聖ギョーム・クルテ」像にも花をささげた。記念庭園の整備に尽力した野下千年神父（カトリックセンター）が案内役を務め、総領事は約20分の滞在を経て教会を後にした。

感謝

—香典返し—

長崎カトリック神学院
●野口マツエ様（本原）故マルコ野口光雄様
●小島トミ様（青砂ヶ浦）故フランシスコ小島 進様
●田川和広様（黒崎）故マリア田川シモ様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

召命を考える機会に

青年のための巡礼ウオーク

毎年ゴールデンウイークに青年を対象に行われている教区召命委員会（岡 秋美委員長）主催の巡礼ウオークが、今年は大村を会場に5月3日（水）～4日（木）の1泊2日で実施された。一部参加の青年も含め11人の青年が集まり、スタッフの神父らと共に約20kmの道のりを歩いた。

最後の道が特に険しかった仏の谷で

1日目は鈴田牢跡から放虎原や首塚、胴塚などいくつかの史跡を巡りながら植松教会までをウオーキング。途中の史跡では、植松教会の信徒の方が大村の殉教者の話をし、史跡について説明した。晩は植松教会に宿泊、夕食会で交流を深めた。

2日目は帯取殉教地跡でミサをささげ、大村純忠終焉の居館跡から仏の谷までをウオーキング。仏の谷に向かう最後の道がかなり険しく、参加者は疲れた様子ではあったが無事に2日間完歩することができた。

今回の実行委員長を務めた野濱達也神父（早岐教会主任）は、「巡礼ウオークを通して、また神父様方との交わりを通して、青年たちが司祭・修道者という召命もあるんだということも考えていただけたら」と語っていた。

これからの活動への糧に

中高生と青年 イースターたまご杯

4月30日（日）、主の復活を分かち合い、青年および中高生の親睦を目的に、長崎南地区青年会主催のイースターたまご杯スポーツ大会を長崎大司教館内の体育館で開催しました。参加者は中学生1人と青年4人、司祭2人とわずかでしたが、楽しく過ごすことができました。

競技内容は、ジェスチャーゲーム、ボーリング、バドミントン、靴飛ばしを個人戦で行いました。各競技で成績に応じた得点制で順位を競い、白熱した試合が繰り広げられました。バドミントンでは2人でチームを組み、勝利チームが得点獲得というルールで実施しましたが、シャトルの行方をとらえながらのラリーやネット際に落としたりするなど、ファインプレーも見られ、試合が盛り上がりました。

主の復活を分かち合い楽しく過ごせたことは、私たちにとって恵みであり、これからの活動への糧となると思いました。このような活動を重ねて少しずつでもつながりを広げられるようにできればと思います。

長崎南地区青年会
橋本裕紀

ミサこん

ミサを共にささげる

北地区青年会主催

4月29日（土）長崎北地区青年会主催の「ミサこん」が、大村市のさわがにキャンプ場で行われた。第4回を迎えた「ミサこん」には、金桐旭（キムドンウク）師（北地区青少年担当、滑石助任）の指導のもと、各教会から9人の青年たち（滑石2、植松3、水主町4）が参加し、野外ミサ、ゲームなどを通して信仰のうちに青年同士の交わりを深めた。

「ミサこん」は2013年11月に初開催。趣旨について同青年会会長の今田亜希さん（水主町教会所属）は、「ミサこんの『こん』が結婚だけをイメージする方が多いようですが、当初から『共に食事し、祈り、会話することでイエス様を中心につながっていくこと』という考えのもと、企画・実行しています」と語る。また、「第4回ミサこんに参加して、『神さまと共に』いることをより感じられた素晴らしい内容でした。参加者は少なかったですが、共に時を過ごすことで絆が深まり楽しい一日となりました」と話していた。

みことばにふれて 138

Sr. ツェリナ・スキビツカ
（けがれなき聖母の騎士聖フランシスコ修道女会）

子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。
（マルコ10章14節）

子どもたちを眺めることが、とても好きです。彼らの遊び、その様子、会話など…。

来日してから、さまざまな出会いの機会がありましたが、日本の一番小さい住人に出会うチャンスがあった時、私は次のように考えました。子どもたちはどこでも同じです。同じ信頼に満ちたまなざしで両親をじっと見つめたり、父親の安全な肩によじ登ったり、大人が彼らの願いをかなえたくない時には、頑固に腹を立て、小さい足を踏みならしたりします。

私は子どもたちのそのような有様を見るたびに、いつも私たちの主が言われた〝神の国はこのような人たちのものだからである〟というみ言葉を思い出します。そしてすぐに心の中で思い起こします。「このような人たち」とはどういう人でしょうか…？　主キリストは私たちに子どもを模範として立たせながら、私たちに何を期待されているのでしょうか？　私たちが腹を立て、足を踏みならさなければならないのでしょうか？　最初の瞬間にはもちろん〝いいえ〟と考えました。けれども必ずしも〝いいえ〟ではないでしょう。「神の国はこのような人たちのもの」とイエス様が言われた時、どのような子どもにもあてはまる純真さ、本物の子どもらしさをイエス様は念頭におかれていたと思います。

子どもたちは裏表のある偽善的な人になることはできません。見せかけだけのふりをしたりもできません。お母さんの首に手をまわして抱きついたり、また気分を害して後ろを向いてすねたりする時も真実です。多分、イエス様は私たちからそのようなありのままの姿を期待されているのだと思います。イエス・キリスト様は、私たちが理想的な人間ではなく、できないことが多くあるということ、度々イエス様の言葉、お望みが分からず、受け入れたくない時もあることなど御存じです。しかし、イエス様にとって私たちの弱さは問題ではありません。彼はそのようなことには素晴らしく対処してくださいます。

問題なのは私たちが自分の弱さ、過ちを認めないで、恐れ、それをどんな犠牲を払ってでも隠そうとする時です。神様のみ前にでも本当の自分の顔を見せません。その結果として私たちは神様の子どもとしての喜び、自由を奪われてしまいます。偶然にでも他の人から自分たちのあまり理想的でない姿が見られないよう、絶えず恐れつつ生きています。

それ故、時には、隅のほうで怒るより、神様のみ前で怒りましょう。私たちにはなぜ分からないのか、どうして賛成することができないのか、心の痛むことをすべて神様にお話ししましょう。私が考えるには、一番良いお父さんは決して私たちに、気を悪くなさいません。全く反対です。私の言葉を聞き入れ、ご自分の膝に座らせ、すべてを説明してくださいます。神様のみ前で私たちは子どものような態度をとることだけを望みましょう。

〝神の国はこのような人たちのものだからである。〟

新刊良書

★日本二十六聖人記念館所蔵品カタログ

1987年発行のカタログが、装いを新たに今年完成した。聖フランシスコ・ザビエルや福者中浦ジュリアンの自筆書簡、「雪のサンタマリア」の絵など約200点の資料の他、展示スペースの都合で展示していない資料や同館の歩みも掲載。オールカラー。B5版、162頁。税別2000円。同館と長崎市内の主な書店で販売中。通信販売も可（送料別）。

問合先・日本二十六聖人記念館（電話 095-822-6000）

訂正

〈二〇一七年度『カトリック教会祝日表』〉
●42頁の下川英利師の住所は、〒852-8135 長崎市千歳町3-8 平方ビル601、電話は095-843-4311。

〈カトリック教報〉
●2017年4月号3面「2人の小神学生が卒業」の記事と、5月号2面「進学・入学を祝う春」の記事の中で、神学生の吉原祐則（ひろのり）さんのお名前の漢字を誤っていました。お詫びして、訂正いたします。

短信

〈堅信式〉
西町教会では4月23日(日)9時のミサで、中学生13人が堅信の秘跡を受けた。

●5月号3面「長崎大司教区現勢統計表」の大浦小教区の女性信徒数は「346人」ではなく、正しくは「446人」です。

ぶどう園

▼『浦上四番崩れ150年 旅の記憶展』開催中　7月22日(土)まで。長崎純心大学博物館。

▼第1回髙見杯ミニバレー大会　6月18日(日)12時30分～15時、大司教館体育館。参加費千円。運動に適した服装と上履き。問合先・山内神父（浦上教会、長崎中地区青少年担当）TEL095-844-1777

▼公開聖書講座「正しい人が苦しむのはなぜ？―『ヨブ記』の答え」　6月18日(日)13時～16時、カトリックセンター。講師・髙見三明大司教。参加費500円。申込先・教区生涯養成委員会。FAX095-841-7732

▼講演会「食の力――新たな家庭の霊性を求めて」講師・伊藤幸史師（東京教区司祭）。①6月24日(土)14時～16時、長崎カトリックセンター。長崎南地区家庭委員会主催。②6月25日(日)13時30分～15時、青方カトリックセンター。上五島地区家庭委員会主催。

男女共学　聖マリア学院小学校児童募集
6/24(土)第1回オープンスクール
9:30～ 受付　10:00～ 歓迎セレモニー（城山教会）
10:30～ 公開授業、説明会、給食試食会（校舎）
※第2回 9月16日(土)・願書受付 9月20日(水)～
〒852-8023　長崎市若草町6番5号
TEL 095-844-1549　詳しくは http://seimaria.net/ホームページにて!!

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー(株)
代表取締役　ミカエル　溝口　晃
〒858-0926　佐世保市大潟町586
TEL(0956)47-4380

日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙
「カトリック新聞」を読んでみませんか？
・教皇メッセージ、バチカン情報　・日本司教団のメッセージ、動き
・日本各地と世界の教会ニュース　・主日の福音解説
・さまざまな信仰体験　・読者の声など
カトリックの“今”を伝えます。
共に生きる カトリック新聞
ご購読のお申し込みは カトリック新聞 検索
03-5632-4432　http://www.cwjpn.com/cwjpn/　週刊(日曜日発行)／1年9,744円　半年4,872円(国内1部、税・送料込)